令和4年度「いじめ問題大人サミット」You Tube Live

～令和3年度子どものいじめ問題・生活に係る実態調査アンケートから～

家族と本気で話したい、いじめの話

本協議会において前年度、「令和３年度子どものいじめ問題・生活に係る実態アンケート」広島市内１９８校の小中学校を対象に児童生徒約４００名・教員約４００名・ＰＴＡ保護者約４００名に配付し、概ね1,２００名の回答を回収し集計しました。（対象：小学6年生・中学2年生・PTA役員・教員 各2名）

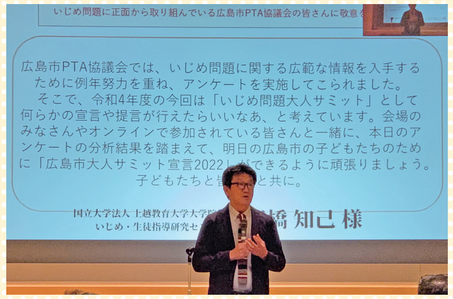
今回の大人サミットも、前年度同様、上越教育大学大学院 高橋教授の考察からの提言となりました。

コロナ禍における2年間、広島市ＰＴＡ協議会で実施している小中学生と保護者、教職員を対象とした「いじめ問題アンケート」は、子どもたちを取り巻く現状を理解することに努めました。

子ども・教員・保護者の３方向から見つめた結果を一部抜粋して公開します。

保護者が学校に足を運ぶことが困難だった環境の中で、学校の思い、保護者の思いはどのように変化していったのでしょうか？

広島市PTA協議会のデータ結果と高橋教授の考察をご覧になった上で、皆さんはどのように感じますか？

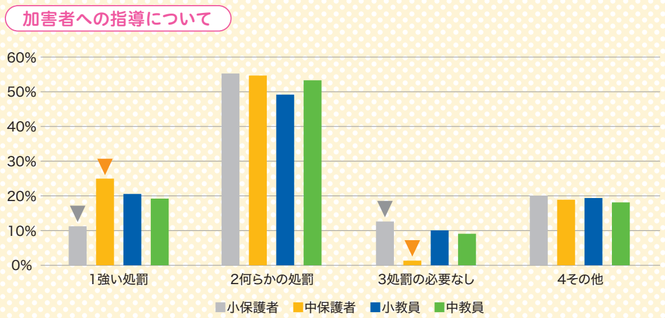


■令和4年8月20日（土）　10:00～11:30
■講師／高橋（たかはし） 知己（ともみ） 氏
国立大学法人 上越教育大学大学院学校教育研究科教授
いじめ・生徒指導研究センター長

加害者への指導について　保護者・教員回答

教員間は小学校も中学校も大きな差はないが、小学校保護者は処罰に対して「寛容」であり、中学校保護者は「厳しい」意見が多いです。この差は、子どもの発達段階を追って厳しくなっています。成長と共に、いじめ行為の被害程度やダメージが大きくなることを感じたり、実際にいじめの被害を身近に経験した可能性が考えられます。

「加害者もカウンセリングを受けるなど繰り返さないための加害者の指導を求める」声がいくつも上がっていました。

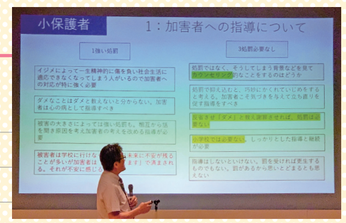


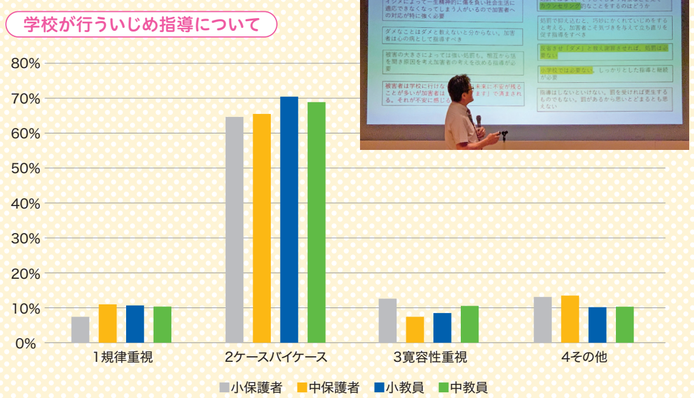
学校が行ういじめ指導について　保護者・教員回答

こちらも教員間では、大きな差はありません。小学校保護者は「寛容性」を重視し、中学校保護者は「規律」を重視しています。

「いじめは犯罪であることを知ってほしい」という声は中学保護者で特に多く、小・中教員からも同様の声が寄せられました。

また、加害行為の原因追及や関係機関との連携の必要性を訴える声もありました。



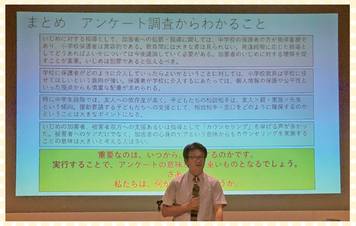


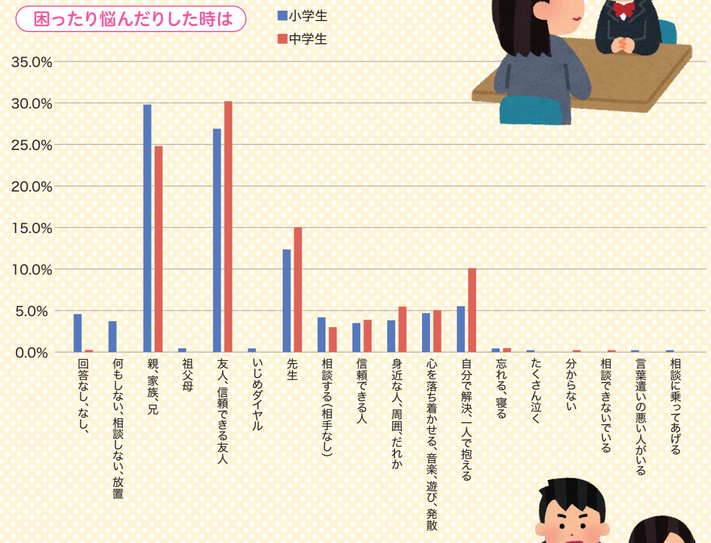
いじめ＝犯罪

困ったり悩んだりした時は　児童生徒回答

小学生の相談相手は「親・家族＞友人＞先生」だが、中学生は「友人＞親・家族＞先生」となっています。また、中学生は自己解決が多いが、小学生は何もしないことが多いです。相談をする選択肢を持っていない子どもや、自己解決、趣味嗜好に没頭して悩みから逃避する姿も見られます。

友人関係でうまくいかなくなって悩んだとき、その悩みはどうなるのでしょうか。友人にも相談できない場合はどうしたらよいのかを、子どもたちに伝える必要があると思われます。

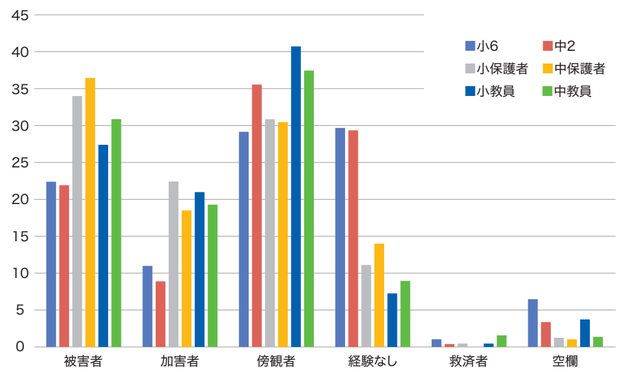




まとめ

今回のサミットでは、宣言文を作って皆様と一緒に共有します。
子どもたちの不安に寄り添える保護者・教員でありたいと、心から思います。
昨年度約1,200名の皆さんに、真剣にご回答いただきましたことを感謝いたします。

あなたはいままでどの経験をしたことがありますか？　児童生徒・保護者・教員回答



複数回答ですが、選択肢になかった「救済者」を伝える声がいくつもありました。子どもたちの中で、友だちを助けたことや、気持ちに寄り添って慰めたなどの記述が強く心に残りました。

大人でも、たくさんの方が被害者加害者の両方を経験しています。また、自分が加害者だったことをしっかりと記述して自分を振り返っている方も多くありました。一概に解決できない問題だからこそ、たくさんの方に関わって子どもたちを見守ってほしいと思います。

いじめ防止対策委員長　山本（やまもと） 岸子（きしこ）

「重要なのは、いつから、どうするのかです。実行することで、アンケートの意味がより重いものとなるでしょう。さあ、私たちは、何から始めましょうか。」